

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520309

研究課題名（和文） ドイツロマン派における自己のテクノロジーとしての断片とパノラマ

研究課題名（英文） Romantic fragment and the panorama as technologies of “subjectification”

研究代表者

クラヴィッター アルネ (KLAWITTER ARNE)

京都大学・高等教育研究開発推進機構・准教授

研究者番号：90444778

研究成果の概要（和文）：これまで「断片」は、美的モデルネの主導的メタファー、あるいは文学的な絶対性の特殊形と見なされてきた。本研究はこうした一般的な見解を見直し、主観性創設の条件を問うことを目指した。とりわけ、近代的な主観性が 19 世紀初めに「断片」のような人工遺物（アーティファクト）あるいは文学形式でどのように表現されているか、さらにはまた近代的な主観性の創設にあって、省察メディアとしての「断片」がどのような役割を果たしたかが問い直された。さらに、第二の主観化テクノロジーとして、パノラマ、すなわち包括的な、ある高い地点から作られるパノラマ的な眼差しが研究された。決定的なのは、フォーコーがパノプティコンに関して述べたような、無制限の可視性という可能性である。このように断片化とパノラマにおけるすべてを包括する眼差しが主観化の異なる二つの技術として考察された。

研究成果の概要（英文）：Until now the fragment has been studied either as a metaphor for aesthetic modernism or as a special form of the literary absolute. The planned investigation intends to overcome this conceptual framework and will ask for the conditions of the subject constitution. In particular, it asks how modern subjectivity expresses itself in artefacts and especially in literary forms like the fragment at the beginning of the 19th century and which role certain aesthetical forms could play for the constitution of the modern subject. The fragment, therefore, is understood as a medium that reflects the conditions of the subject constitution. In addition to the fragment, I want to examine the panorama as a second way of subjectification. Characteristic of the panorama is the view from an elevated point and the possibility of unlimited visibility. Thus, it implies the ubiquity of the gaze and is linked, in a certain sense, to the panopticon, which was described by Foucault in his study “Discipline and punish”. Both, fragmentation and to the arrangement of the panorama, will be studied as complementary techniques of subjectification.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

科研費の分科・細目：ドイツ文学

キーワード：主観化、フーコー、パノプティコン、パノラマ、断片（断章）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1800年頃に二種類の「主観化」テクノロジーが顕在化して来ることに着目して、これら完全に別物でありながら、同時に相補的でもある「主観化」テクノロジー同士の比較検討を出発点に置いている。

「パノラマ」のコンセプトはロバート・バーカーによって発明されたものである。彼は1792年にこれを絵画芸術における技術的な革新だとして特許を取り、1794年にはロンドンで史上初めて完全な形のパノラマを作った。

注目すべきは、その後まもなく（1798年）ノヴァーリスの断片集『花粉』が雑誌『アテネウム』に発表されたことだ。フリードリヒ・シュレーゲルによる断片形式の準備的な試み（哲学ノートにある哲学的な断片）はそれどころか1794年にまでさかのぼる。

この二つの現象は一見したところあまり関係なく見えるかもしれないが、詳しく考察してみると、「パノラマ」と「断片」が時代を画するような大事件であったことがはっきりしてくる。しかも単に美的認識や文化史および文学史に関してそういえるだけではなく、とりわけ個人が18世紀末に「主体/主観」として創設されるようになるあり方に関してそうなのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロマン派の「断片」とパノラマとを、文学的美学的な現象として捉えるのではなく、主観性創設の観点から捉え直すことにある。

これまで「断片」は、一般に、美的モデルネの主導的メタファー、あるいは文学的な絶対性の特殊形と見なされてきた。しかし最近では、「無限連鎖的につづく批評の批評」というロマン派の発想を踏まえた上で、「断片」を出発点としながら、ジャンル概念ならびにロマン派的観念論的哲学を脱構築するような試みもはじまっている（メニングハウス、ハーマツハール）。しかしこうした新しい分析もつねに「知の秩序」（エピステーメ）の枠組み、そして文学、美学、哲学などの既成の学問領域にとどまっており、「作品」「主観

性」「批評」など、それらに対応する概念に縛られたままである。

本研究はこうした現状を打破して、近代的な主観性が1800年頃に芸術や文学にあってどのように表現されているか、さらには「断片」が省察メディアとして近代的な主観の創設にとってどのような役割を果たしているか、を問い直そうとした。ただし、主観性創設の条件は社会的コンテクストに求められるものではなく、一方で言語と知、他方で言語と主観との根底的な関係に求められなければならないのは言をまたない。

3. 研究の方法

本研究は主観化テクノロジーに関するミシェル・フーコーの分析を踏まえた文化史的方法によっている。それに加えて、フーコーの権力分析とディスクール分析も援用している。

フーコーとそれを発展させたジル・ドゥルーズの研究を踏まえて、まず断片の言説的機能、歴史的な知の秩序、主観化の実践、この三者を関連づける必要があった。なかでも、規律化のテクノロジー（権力）、記号化テクノロジー（知）、従属化テクノロジー（主観）の間の関係に重点が置かれた。

フーコーの研究にとって三者をつなぐ中心的なものはパノプティコンである。これは18世紀末にベンサムによって発明され、様々な社会的な領域に広がっていった（監獄、病院、学校、軍）。

フーコーのパノプティコン研究は同時に、芸術と社会における他のコンフィギュレーションを探し求めるきっかけになるものであった。それら新たなコンフィギュレーションを出発点に置けば、知、権力、主観化の関係を別の観点から検討することも可能になるだろうと考えた。

18世紀における啓蒙の感覚的な知覚を決定的に特徴づけるそのようなコンフィギュレーションの一つは枠にはめて見るということだった。これは18世紀にはいたるところで見られた現象であり、あらゆる種類の告知に見いだされた。論文の表題、ポスター、本や楽曲の題名などはこの原理に従い、読者の注意を額縁に囲まれたフィールドに集中させようとする明確な意図をもっていた。

文学的なポートレート（例えばゲーテの『親和力』に見られるような）もこの原理に従っている。対象を明確に定義できる視野のなかに囲い込むことによって、注意を向けた対象をできるかぎりはっきりと知覚したいという必要が満たされたのだ。

これは啓蒙期の合理主義の芸術的な要求にも教育的な要求にも応えるものだった。1800年ごろにはこの枠で囲って物を見るのは廃れていくが、この終焉は歴史的に見て、パノラマの興隆と結びついている。

従って、本研究計画の遂行には、数多くの歴史的資料（雑誌記事、手紙、歴史記録、そしてまた文学作品も）を集めることが不可欠であった。この理由から資料収集を目的としたドイツへの数度にわたる出張が不可欠であった。

4. 研究成果

よく知られているように、パノラマの特徴は視線の遍在である。その際、個人は無際限に見る者、すべてをその眼差しで見通すことのできる主観として創設されることになり、これによって個人はその主権を確かなものにする。他方で個人は眼差しに完全に従属することになる。個人は主権的な眼差しの対象とされるのだ。

従って、特徴的なのは、知の主体であり客体であるという主観の二重性である。ここから「サブジェクト」という概念の二義性が生まれてくる。つまり主観は意識と自己認識によって自己同一性を獲得しながら、他方でコントロールと依存によって誰かに従属しているのだ。

これに対して、無際限の眼差しではなく、言語を基準とする「断片」化は、逆方向を向いた主観化テクノロジーであることが明らかになる。というのも断片化は、イロニー、機知、ひらめき、融通無碍なパロクスなど新しい言語的形象を作り出すからである。

断片化の特徴は、有限性の経験、意味の停止（シュレーゲルの言葉では「理解不可能性」）、そして目に見えない絶対的なものへの間接的な示唆である。絶対的なものは、初期ロマン派にとって原則的に眼差しを逃れ、目に見えず、表現できないもの、ただ予感することしかできないのであった。

このケースにあっては、主観は取り消しがたく有限な主観、未来に向けられた、言い換えれば、たえず自らの有限性を考察する生成してやまない主観である。こうした背景を踏まえれば、断片化は、不易なる「存在」というコンセプトを廃して、思考過程における主観の変形を目的にすえる試みと

見ることができる。この思考過程にあって、それぞれの断片は、その断片化された存在様式によって、絶えず自らの有限性への洞察を保持しつづける動因あるいは衝撃として働くこととなる。

以上の成果は、その一部が、査読付きのドイツの学術誌に発表する論文1本、および学術論集寄稿した論文1本として公刊されることが決まっている。また今秋の早稲田ドイツ語学文学会でも主要な論点について口頭発表をする予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

1. Arne Klawitter: Zwischen Verwunderung und Vergnügen. Das Panorama bei Goethe und den Romantikern, in: Weimarer Beiträge 59/3 (印刷中)

〔図書〕（計2件）

1. 共著 Arne Klawitter: Sichtbarkeiten jenseits des Blicks. Das visuelle Dispositiv in der modernen französischen Literatur, in: An den Grenzen des Bildes. Leere, Latenzen und Blindheit, hg. von Philipp Stoellger und Marco Gutjahr, Würzburg: Königshausen & Neumann 2013, S. 121-137.

2. 共著 Arne Klawitter: Die Forderung des Fragmentarischen, in: Marco Gutjahr (Hg.): Das Desaster der Literatur. Einsamkeit, Negativität und Terror bei Maurice Blanchot (2013/14年刊行予定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

クラヴィッター アルネ (Klawitter Arne)
京都大学・高等教育研究開発推進機構・准教授
研究者番号：90444778

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし